



異譚  
綺聞 犯罪夜話

裁判夜話／裁判異譚／裁判綺聞 抄（2）犯罪篇

大森洪太

書肆心水

本書は、大審院判事、司法省民事局長、名古屋控訴院長、大審院部長、司法次官等を歴任した大森洪太による一連の著作『裁判夜話』（一九三〇年刊）『裁判異譚』（一九三一年刊）『裁判綺聞』（一九三三年刊）——いずれも日本評論社刊——が収めるものを選別して配列しなおしたものである。本書では概ね記述量の多いものから順に配列した。

第一の分冊『異譚綺聞 裁判夜話』には裁判に関する記述に重みがあるものを収め、第二の分冊『異譚綺聞 犯罪夜話』には裁判というよりは犯罪（事件、捜査、刑罰）に関する記述に重みがあるものを収めた。なお、右記三書に、はしがき、あとがきの類は付されていない。

## 目次

内親王と名乗った女の話 11

魔の手紙の話 26

或る無垢な少女の話 43

私立探偵の元祖の話——ウーージェエース・ヴィドック、ジヨナサン・ワイルド、ウイリヤム・ピンカートン

57

検事長を殺した弁護士の話 70

美しい刺客の話 83

帝王の寵臣となった泥棒の話 96

疑獄の謎を解いた女探偵の話 106

危機一髪の話 116

今様女殺油地獄の話 126

妙な禁酒の話 136

死刑叢話 145

疾風魔の話 155

魔人の魔薬の話 165

不思議な最後を遂げた教授の話 175

医学校で殺された美人医学生の話 184

恐ろしい愛慾の話 193

四本の手を使った女の話	202
豹の乳で育った伯爵の話	210
盗まれた国宝の話	218
大きな巡査	226
微笑夜叉の話	234
司法大臣を生んだ怪賊団の話	242
恋を弄んだ貴婦人の話	249
犯罪と人情との間を往来した美人の話	256
探偵史最初の電報の話	264
或る風流男の話	272
怪談坊主殺し	279
怪談親殺し	286
首締め名人物語	293
死刑の歴史	299
泥棒の歴史を一変した男の話	305
老賊述懐	310
風変りな拷問の話	315

異譚  
綺聞

犯罪  
夜話

—— 裁判夜話／裁判異譚／裁判綺聞

抄（2）

犯罪篇

## 本書での表記について

- 一、本書では新字体漢字（標準字体）、現代仮名遣いで表記した。「劃」「聯」「輯」「互」は旧字体ではないが、現在一般的に使われる同義の「画」「連」「集」「亘」におきかえた。
- 一、現在一般に漢字表記が避けられるものは仮名表記におきかえた（例、略々↓ほぼ）。
- 一、番号付きの小見出しからは番号をはずし、番号のみの小見出しは一行空きとした（この一行空きではない一行空きはない）。
- 一、送り仮名を現代的に加減調整した語がある。読みを定め難い場合は元のままにした（例、直ただに）。
- 一、句読点、中黒点を加減調整したところがある。
- 一、読み仮名ルビを付加した。また、現在ではなくともよいと考えられる読み仮名ルビを削除したところがある。
- 一、よく知られた固有名詞の英語読みを現地読みにおきかえた場合がある。
- 一、鉤括弧の用法は現代一般の慣例によって整理した。
- 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用し、そのほかのものは文字にした。
- 一、同じ語の表記を统一的に処理したものがある。
- 一、誤用と見るべき語表記を訂正した場合がある。
- 一、罫字の一字空けは省略した。
- 一、抄録としたこと、収録文章各篇の配列を変えたことによって参照指示の記述が意味をなさなくなつた場合、それを削除した。
- 一、書肆心水による注記は「」で示した。

## 内親王と名乗った女の話

一六六〇年代と云えば、英国では、流石の執政府もクロムウエルの死後は遽に凋落して、チャールス二世に依って、王政復古した頃のことである。チャールス二世は気楽な自堕落な国王だった。駄洒落が得意で、賭博は大好きだったが、国務の方は一向不熱心だった。今も尚残るドルウリー・レイン劇場の蜜柑売から女優になって、満都の公子を悩殺したネル・グウィンを寵姫にしたことは、有名な史実である。上の好むところ、下にも及んだ次第であるか、一般にクロムウエル時代の清厳な気風はいつしか失せて、総てが暢気でだらしがなかった。その頃のことである。

ロンドンのその頃の船着場のビリングスゲイトにエキスチェンジ・タヴァーンと云う宿屋兼業の料理屋があった。その時代の風習で、金持の連中は朝からそこに集って、酒も飲めば、博賭も打つ。つまり、社交クラブで、屈託のない連中の暇潰しの場所である。

話はこの社交クラブから始まる。

ロンドンのビリングスゲイトの金持連の社交クラブ、旅籠屋のエキスチェンジ・タヴァーンに天人が現れた。社交クラブは今も昔も男の遊び場所だが、その男の遊び場所へ、突如として美人が顔を出した。



しかも、素晴らしい美人である。雲の間から三保の浜へ、ふうわりと天女が降りて来た。それ程ではないにしろ、それに近い驚異であつたに相違ない。

美人は芳紀二十一、二、それとも、三か四か、やや愁いの色は浮んでいるが、顔も姿も真に類い稀な国色である。しかも、その天稟の麗質を更に麗しく見せたのは、その錦繡の美装である。金の唸るロンドンの船着場でも、行人の眼を眩ますに足る衣裳である。

この美人は勿論天から降りて来たのではないが、大陸から船に乗って来たのである。只々一人飄然として、この宿屋へ来たのであるが、宿屋の主人のキングは職業柄顔よりも先ず服装を一瞥した。ひと目見て愕いた。これだけの服装はロンドンの呉服屋では、一寸手に入らない、何しろ、大した金持に相違ない。服を見て感心してから、顔を見た、顔を見て更に吃驚した、綺麗だ、立派だ、気高いものだ、珍客御入来、宿賃の取れない心配は勿論ない、かかる高貴な美人を客にすることは、宿屋冥利、商売繁昌の瑞祥、有難いことだと、平身低頭して、早速最上等の部屋へ案内した。

美人は仔細あつて、大陸の或る宮殿から遁げて来たものだと、自分で語つた。

しばらく逗留している間に、社交クラブに出入する金持連とも知合になつて来た。常連のクラブ室へ招かれて、慎ましやかに、杯を口にするこゝもあつた。

他人の事を立ち入つて聴きたがらない——少なくとも、聴きたいような素振りを見せないのは、教養ある英国人の特徴である。しかし、相手が絶世の美人であり、宿屋の一人客であり、殊に宮殿をひそかに脱出した高貴の女性であるにおいては、好奇心も起れば、同情の念も生ずる。時にはそれとなく訊ねたけれども、只々打ち沈んで、かすかに溜息を洩らすだけである。

或る夜、例の如く、クラブの常連が集つて、何か少しく大袈裟な宴席を設けた時に、謎の美人を招待した。この夜は美人も大分打ち解けていたから、人々はその素性を訊ねたが、羞ずかしげに躊躇する風情は、「猶抱琵琶半遮面」の趣がある。

美人はようやくくにして、語り出した。

自分はドイツ皇帝（その頃歐洲唯一の帝室であつたことは、云うまでもない）の太子ハインリヒ公の内親王で、宮廷の花と謳われた者であるが、ひそかに若い侍従と相許して、将来を深く契つた。その若い侍従は昔の騎士のように、神を畏れて人を怖れぬ健全な青年であつたが、貧乏華族の生まれで、内親王の配偶者としては門地が甚だ低いと云う理由の下に、祖父皇帝は我等の結婚を峻拒した。そればかりではない、若い侍従を大逆罪の名目で、死刑にしてしまった。若い侍従は忠誠の士であつた。勿論大逆の如きは思ひも寄らぬことであつたが、只々自分にその男を思い切らせる方便として、可哀想に、無実の罪を着せたのである。そして、自分を或る王家の妃にしようとしたが、自分は自分故に冤枉えんむちうの死を遂げた若い侍従に操を立てて、飽くまでもそれを拒絶したから、迫害は自分にも及んで来た。そこで、自分は暮夜ひそかに宮殿を脱出して、ようやくここに辿り着いたのであるが、思えば果敢なき身の上である、かつては歐洲最高の元首の直系として、雲の上の寵愛を一身に鍾あつめたけれども、今は天涯の孤客として、羈旅の間に離愁に沈んでいる……

ドイツ帝室の内親王は且つ語り且つ泣いた。唧々しやくしやくの思いは嗚咽の裡に洩れて、聴く者は皆首を垂れた。クラブ員の同情が翕然として、ドイツ内親王に集注せられたことは、云うまでもない。毎日毎夜、クラブ員は内親王に御馳走を奉つた。

内親王は贅沢に育てられたことは勿論である。クラブ員から御馳走を受けると、内親王はきつとその返礼の招待会を催される。宿屋の主人キングに関する限りは、クラブ員が内親王に御馳走を奉つても、内親王がクラブ員を招待せられても、会場はいつも自分の方にきまつているから、結構なことではあるが、さて、余り結構でないのは、内親王が一向勘定をせられないことである。ドイツ帝室の内親王様だから、これまで、御自分で金銭の出納を取扱われたことは、勿論ないだろう、しかし、今は独りで自分の宿のお客になつておられるのである、宿賃を支払ってもらわなければ、商売はあがつたりである、しかも、随分贅沢でいらっしゃるのだから、宿賃も余程の高に上っている。

そこへ、又一つ、不思議なことが出来て来た。宿屋の主人キングの細君の弟のカールトンと云うのが、親類の間柄だから、よくこの宿屋に遊びに来る。近所の小金持の若主人で、男つ振りの好い独身者であったが、内親王は近頃このカールトンに思いを寄せておられる模様である。カールトンの方では勿体至極もないことで、ひそかに思い焦れていたけれども、所詮卑賤の者では手の届かぬ高嶺の花である。諦め兼ねるを諦め、抑え難い熱情を抑えていたのであるが、先方からそれとなく有難い思召しを蒙つたのであるから、有頂天になつて、身に余る光栄を感激して拝受したのである。どうも、それが怪しい。いくら日蔭の御身の上とは云いながら、ドイツ帝室の内親王様がロンドンの小金持に将来を託せられるはずはない。事に依ると、喰わせ者かも知れないと、宿屋の主人キングは恐る恐る疑念を挟み初めた。

「畏れながら、殿下に申上げ奉りまするが、甚だ、その失礼千萬な次第で、申上げて宜しいやら、どうやら、手前とんと愚存の及びませぬような始末で、昨夜家内とも談合致しまして、へえ、その何でございま

す、決して手前損得のことを申上げる儀ではございませぬ、殿下には、へえ、その甚だ失礼で、へえ、全く手前考えまするには、お宝、いやお持物、へえ、全く、御所持金お手薄のように拝察仕りまするが、いえ、決して手前宿賃の儀を申上げる次第では毛頭ございませぬが、へえ、上つ方様におかせられましても、金子と申しまするものは、御手薄ではどうも御不自由で、恐れ入ります、御無礼を申上げまして、実は前申上げまする通り、家内とも談合致しましたので、手前共考えまするには、一度、ドイツのお里、へえへえこれは大失礼な、その何でございます、御皇室様へお帰りになりまして、その御手許金の儀を、へへへへ……」

宿屋の主人キングが吃りながら、言上するのを聴いて、内親王は言下に答えた。

「わかりました、私が今手許に金がないものだから、ドイツへ帰った方が宜かろうと云うのでしよう、わかりました、私もそう思います、手紙で大蔵大臣へ云ってやってもいいのですが、外に内密の用もありますから、私は一度ドイツへ帰りますがね、帰ってもすぐ又ここへ参りますよ。とにかくひと月ばかり行って来ましょう。お宿賃の方はねえ、御心配には及びませんよ、真逆私がねえ、ほほほほ。」

内親王は言い終って、朗かに笑った。なるほど、ドイツ帝室の内親王が宿賃を踏み倒すようなことはないはずだ。宿屋の主人の方では半信半疑だったので、もし贗者だったら、狼狽えて、すぐに馬脚を露わすだろうと思つたのだが、狼狽えるどころか、言下にドイツへ帰ろうと云われた。勿論真正銘の内親王様の証拠である。そして、又ここへ来て下さると云う御思召しである。有難いことだ、宿賃のことに付いては、「真逆私がねえ、ほほほほ」と仰せられた、全くその通りだ。たとい一時にしろ、お疑い申したのは、恐れ多いことだ。びつちより冷汗に浸って、主人キングは重ねて平身低頭した。

かねがね内親王から敵に申渡されていたことだが、内親王の素性はクラブ員の外には、絶対に秘密にしていた。この度内親王帰国に付いても、クラブ員は自分達にのみ打ち明かされた光榮な秘密として、勿論それを外部に洩らさなかったが、自分達の内部では、内親王のためには、出来るだけの努力はした。内親王の旅費は云うまでもない、ドイツ帝室へのみやげ物も、クラブ員の贖金に依って、まずは立派に調った。

ふた月たつかたないうちに、内親王は大陸から帰って来た。巨額な金子は勿論、宝石珠玉も夥しく、高級の勳章までも持って帰ったから、宿屋の一同、クラブ員等の内親王に対する信用は確乎不動のものになってしまった。

亡命中のドイツ内親王はロンドン、ピリングスゲイトの小商人ジョン・カールトンと結婚した。義兄キングの満足は云うまでもない。宿賃の外にたんまり御祝儀を頂戴したことは勿論である。クラブ員の方は又、自分等が内親王だと思つて支持した女性が、果して真に内親王だったのだから、これも得意である。もしそれ新郎ジョン・カールトンに至つては、天下第一の僥倖兒、歐洲最高の元首の直系たる絶世の美人に思われて、めでたく夫婦となったのだから、男冥加の日の下開山、夢にしたところで、勿体ないほどの夢だが、それが本当の現実になったのだから、この位嬉しいことはない。

ドイツの内親王とロンドンの金持の小商人のカールトンとは仲よく暮らしていたが、或る日、カールトンの義兄の例の宿屋の主人キングの許へ、不思議な手紙が舞い込んだ。差出人の名は書いてないが、しっかりした筆蹟で、文句は相当鄭重だった。しかし、手紙の中味はキングをして啞然たらしめるに十分なも

のだった。

手紙の要領は、ドイツの内親王と称する女が、あなたのお世話で、あなたのお世話で、あなたの御親戚へ片付いたそうだが、御用心までに御通知するが、その女は詐欺師である、ケント州で既に数回結婚したこともある女だが、随分念の入った嘘つきである、もしこの手紙をお疑いになるならば、彼女の身体にはこれこれの特徴がある——と云うのである。

キングは真つ青になつて、カールトンの許へ駆け付けた。身体の特徴と云うのが、ぴったりと事実に符合する。

果して、ドイツ帝室の内親王は真つ赤な贋者だったのである。

真つ赤な贋者の自称内親王、実は英国はカンタベリーの貧家の娘である。

カンタベリーは人も知る英国国教の大本山の所在地で、英国東南の海に近く、スツウア川に臨んだ清麗な都邑である。そのカンタベリーの町外れに、小さい荒物屋の店を出して、自分は大本山の唱歌隊の常雇をして、モードラスと云う男があつた。勿論貧乏人である。このモードラスの娘が則ち本篇の女主人公、ドイツの内親王と名乗つた女詐欺師のメリーである。

メリーは一六四二年に生まれた。丁度チャールス一世の晩年に当る。おやじは唱歌隊の常雇となつた位だから、声は好かつただろうが、別に善い智慧も悪い智慧もなかつたようである。娘のメリーは小さい時から目鼻立ちが勝れていた。今日では、不良少年とか、犯罪素質とか、犯罪の萌芽の探究や子防の方法が相当地に攻究せられてゐるけれども、何しろ、三百年も前のことである、田舎町の貧乏人の小娘に調査の手の届くはずがない。尤も、幼少の頃に、官憲の手を煩はしたと云う証跡が残っていないから、まず通常の娘

## 或る無垢な少女の話

イングランドからひと足スコットランドへ入ると、風趣がようやく荒涼の色を帯びる。国境を超えたばかりのこの村でも、岡の姿も黒ずんで、野を吹く風の音にさえ、うら寂しい響きを伝える。

この村の薄暗い鍛冶屋の仕事場に、この村には、ましてやこの鍛冶屋の仕事場には、ふさわしからぬ一人の美しい少女が立っている。岩間に咲いた一もとの白百合か、木々の梢の間にはの見える彼岸桜の風情を見せて、可憐な若い女性が立っている。

若い女性に寄り添って、三十位かと見える——勿論百姓ではないが、会社員とも見えない——都会に近い小地主の倅か、それとも、今で云えば、自動車屋の若主人のようだが、その頃はまだ自動車屋と云うものはなかった。とにかく、風采の賤しくない男が立っている。

この男女の前に、頑丈な老人、これはこの鍛冶屋の主人だが、熊谷陣屋の弥陀六実は弥平兵衛宗清と云ったような恰好で、控えている。

時は一八二六年の或る日。ここはスコットランド西南部ダンフリースシャイア州の一寒村、グレットナ・グリーン、この鍛冶屋は大した鍛冶屋である。

さて、グレットナ・グリーンンの鍛冶屋に付いての説明だが、話は少々長い。

時の古今を問わず、洋の東西を論ぜず、結婚は人の一生の大事事件で、その成立には、一定の方式を必要とする。時代に依り、風習に従って、この方式は一樣ではないが、我が民法に規定する戸籍吏に対する届出の如きは、最もお手軽な一例だけれども、とにかく、どここの国でも、結婚には方式を必要とする。

結婚に方式を必要とするのは、その結婚を公示するためである。天下晴れて夫婦になると云う、その「天下晴れて」のためである。未開時代には、今後他人に取られぬための用心、文明時代には、人生の大事事件の公表、結局、いずれにしても、公示のための方式である。

然るにここに、堅く相約し、深く相契った男女が、親の許しは得ないけれども、知己友人は反対するけれども、即ち、天下晴れてと云う訳にはゆかないけれども、どうしても結婚したいと云うことがある。こっそりと夫婦になりたいと云うことがある。しかし、結婚の方式は公示を以て旨とする。どうも、「こっそり」と「公示」とは衝突する。

そこで、法律上有効に結婚はしたいのだが、こっそりと夫婦になりたい、即ち、公示を旨とする結婚の方式は守りたくないと云った場合に、いつ誰が発明したのか、それはわからないが、近古の英国において、うまい抜け道が出来ていた。

近古の英国において、結婚の方式は教会で牧師の司会の下に行われたことは、云うまでもない。(現在では、登録吏に登録することも、一つの方式として、認められているが。)そこで、正式に教会へ行かないで、こっそりと牧師に頼む。とにもかくにも、牧師の世話になったのだから、法律上有効に夫婦にはなれるが、世間には知れずに済む。その牧師はただの牧師ではない。驚くなかれ、監獄にぶち込まれている牧師であ



る。監獄の中で、結婚式が行われたのである。なるほど、これならば、世間へ知れない。

さて、又、その監獄のことである。

今は暗渠になつて、その影を没したが、ロンドン市（大ロンドンのうちの固有のロンドン市）の西口において、テムスに合流するフリートと云う小川が、その昔はあつた。このフリート川のテムスに合流する所をフリート町と云う。このフリート町に、フリート監獄があつた。第十二世紀の頃からの監獄だが、降つて、メーリー女王とエリザベス女王との時代には、異端者がここに投ぜられた。メーリー（ヘンリー八世の第一女王のメーリーである。スコットランド女王のメーリーではない）とエリザベスとは異母の姉妹だが、姉のメーリーは旧教信者で、妹のエリザベスは新教信者だつたから、姉の時代には新教徒を、妹の治世には旧教徒を、このフリート監獄に幽閉したのであるが、後に政治犯の収容所となり、幾多の悲惨な物語を作り上げたが、それから、借金監獄になつた。

借金監獄と云うのは、一寸説明を要するが、借金をして返済の出来ない債務者が監獄にぶち込まれたのである。（今でも、極めて重大な制限は受けているが、一部分は現行制度として、英国に残っている。）監獄へぶち込まれるのではあるが、債務不履行のためで、犯罪のためでない。罪人と待遇を異にすることは勿論で、面会も比較的自由だつた。

借金してそれを返済しなければ、牧師でもフリート監獄にぶち込まれる。そこで、フリート監獄にぶち込まれている牧師に頼んで、監獄の中で結婚式を司つてもらうのが、この時代に、こつそりとしかも有効に結婚する方法だつたのである。結婚せんとする男女は面会の形式で、外部から監獄を訪れるのである。司会料は貧富に依つて一定しないが、最低は一円二十五銭（ハーフ・クラウン）で、いい商売になるものだから、監獄内の牧師は娑婆へ客引きを派出せしめて、頻りに男女を勧誘していたと云うことである。

## 私立探偵の元祖の話

—— ウーージェエヌ・ヴィドック、ジョナサン・ワイルド、ウィリヤム・ピンカートン

私立探偵と云うものは、余り古いものではない。しかし、遽に殖えた。この商売ばかりは不景気の影響を受けないらしい。何と云っても、アメリカが本場である。英国にも随分あるが、流石に警察と私立探偵との分野がはっきりしている。勿論、警察が私立探偵を利用することは多いが、私立探偵が警察の権限を侵犯することはない。ここにも、英国の堅実性が窺い得られるが、アメリカでは、両者の限界が混沌としているようである。いくらアメリカでも、私立探偵に犯人の逮捕権はないが、大抵の事件には、私立探偵が活躍している。私立探偵の発達は結構なことだが、もし、それが警察力の退歩を意味するならば、それはもとより浩歎すべきところである。

私立探偵が警察を凌駕することは、むしろ甚だ寒心すべきことではあるが、私立探偵の活躍の範囲は警察よりも広い。結婚調査や雇人の身元調査は勿論、信用調査、財産調査、或る物件の価額や来歴の調査、銀行会社の内情調査の如きは、私立探偵の得意の世じょう壇場である。

この私立探偵業の歴史、その元祖開山に付いて書いて見る。

私立探偵の元祖は、フランスでは、ウーージェエヌ・ヴィドックである。

ヴィドックは泥棒である。泥棒仲間の大親分である。その大泥棒が政府から俸給をもらって、警察事務に關係していたのである。ヴィドックばかりではない、その手下の中で、錚々たる手合は御大将ヴィドックの推挙に依って、警察に勤めていたのである。それは第十九世紀の前半期のことだが、まさか、勅任待遇、奏任待遇と云ったような訳ではなかっただろうと思われるけれども、日本左衛門を始めとして、弁天小僧、忠信利平、南郷力丸、指の先の曲った連中がパリの警察本部を構成していたのだから、いかにも奇抜である。尤もいくら泥棒でも、足を洗って、前非改悛の懺悔奉公に探偵の御用を勤めているのなら殊勝な次第だが、ヴィドックの一味徒党は、一面において警察の御用を勤め、他面においてやはり盛んに泥棒を働いていたのだからたまらない。この水陸両棲、首鼠兩端の大怪物ヴィドックがフランスにおける私立探偵の元祖である。ヴィドックの物語には面白いことが多いが、私はかつてその話を書いたから（拙著『不思議な犯罪の話』第二二頁以下参照）ここには反覆を避けて、詳しいことは省略する。

ヴィドックは自分自身の犯罪で在監中に、自分を警察で使ってくれるならば、御用は必ず立派に勤めると申出でた。官憲の方では、泥棒の跋扈に閉口し切っていた時である、ヴィドックは大泥棒である、その遣り口はいかにも放胆で、しかも甚だ細心である、なるほど探偵の御用は立派に勤めるに相違ないと考えて、私ひそかにヴィドックを出獄せしめて、警察本部出仕と云うことにした。泥棒を警察の手先に使うのは、好ましからざることではあるが、警察の機能が十分に発達しなかつた頃には、どこの国でも採用していた慣行だったけれども、ヴィドックの起用は甚だ以て大仕掛であった。ヴィドックは部下の俊秀（？）十二人を引き具して、パリの警察本部に陣取ったのであった。

ヴァイドックは大泥棒である。蛇じやの道は蛇へびで、ヴァイドックの手に懸かると、大抵の泥棒は逮捕せられる。逮捕せられた泥棒は、ヴァイドックにぐつとひと目睨にらまれると、すぐにべらべら白状してしまう。

ヴァイドックの起用は大成功だった。十四年間官憲の眼を掠めて、ポンティ・ド・サンエレン伯の名を冒用し、陸軍の頭官に成り上り、国王ルイ十八世の殊寵をほしのままにしたコアナル（本書九六頁「帝王の寵臣となった泥棒の話」参照）をふん縛ったのも、このヴァイドックである。

ヴァイドックは一定の俸給を受ける外に、事件の成功毎に相当の賞与金をもらっていた。事件があると、必ず成功するのだから、賞与金はたしかにもらえたが、事件がないと、勿論、賞与金にはあり附けない。そこで、事件がない時には、ヴァイドックは自分で事件を拵えて、賞与金の種を蒔いた。即ち、手下に命令して、泥棒を働かしめる。それを、自分が捕えて、賞与金をせしめるのである。これこそ外れっこのない金儲けの方法である。手下こそ好い面の皮だが、大親分には勝たれない。

所詮、ヴァイドックは殊勝に奉公するような男ではない。一切が金のためである。泥棒よりは安全な、しかも泥棒以上に悪い——泥棒教唆と探偵との兼職だから、たちの悪いことは云うまでもない——金儲けをしていたのである。

それでも、ヴァイドックの黄金時代は十七年も続いた。しかし、官憲もようやくヴァイドックに愛憎（マエ）を尽かして来た。

ヴァイドックは遂に罷免せられたのである。

そこで、ヴァイドックの思い附いたのは私立探偵業であった。ようやく時勢が進んで、私立探偵業の必要

## 検事長を殺した弁護士の話

これは実話である。いくら潤色して書けば、少しは面白いものになるかも知れないが、事実を単に事実として紹介する。只々、いかにもこの話は奇抜である、悲惨である。しかも、この話に出て来る主要な人物は、二人が二人共、立派な法曹である。そこで少々古い話ではあるが、書いて見る気になったのである。

一九一四年と云えば、世界戦争の勃発した年である。その年の夏、中欧の南陔に立ち上った一道の殺気は、たちまち凄愴な風陣を捲き起して、歐洲全土に阿修羅の劫火は閃裂した。

人を呪う怨霊は、随処に累々たる戦士の屍を眺めて、凄笑を洩らしていたが、それでもまだ飽き足りないで、戦塵に埋もれた壮者の屍骸の腐った血で、執念深いインフルエンザの毒菌を作り上げて、それを東西に撒布した。この毒菌は好んで青春の男女を侵し、殊に多く初妊の妙齡の婦女を襲った。この世の春の歓楽を鍾むる新婚の家庭から、若い妻とやがて生まれ出さずべき胎児とを奪い去ったのである。この病気で死んだ者は、幾十万の戦死者の更に幾層倍に上ったと云う。

しかしながら一九一四年の早春四月の頃には、何人も三月後の大戦の勃発を予測しなかった。全世界の

温帯地方の気象はすべて平静軽寒だったと云う。ニューヨークでもやはり穏かな日が続いた。戦争の起ると共に、合衆国は宇内第一の金権国となつて、世界中の黄金は悪獸の如き唸り声を立てて、ニューヨークに流れ込んだが、開戦三月前のニューヨークは只々これまでの通りのニューヨークに過ぎなかつた。

その一九一四年の四月の或る日、新聞の夕刊で、ダニエル・シックルスの死んだことを知つたニューヨークの人々は、あの話好きな好々爺を喪つたことに付いて、誰も淡い哀愁を感じたのであつた。

全く、シックルス老人は話好きであつた。又話上手でもあつた。殊に話題は極めて豊富だつた。若い時には、独立戦争に生き残つた多くの勇士に逢つてゐた。南北戦争には陸軍少将として、北方のために奮戦してゐたのである。リンカーンやグラントをも知つてゐた。特にグラント將軍には殊遇を受けてゐた。一八六三年の七月の一日から三日に亘つたゲティスバーグの戦争は南北戦争の中でも最も惨憺たるものであつた。この戦争において、シックルスは隻脚を失つたのである。しかのみならず、シックルスは海を超えたヨーロッパの事情にも精通してゐた。テムスの川霧の落着いた情趣や、マドリッドの春の夜の華やかな情調は、手に取るように話して聴かせた。英雄の面影や、異国の風習や、面白い話はシックルス老人の唇から衰々乎として湧き出でて、その出入するクラブは、まるで老人の長講独演の高等寄席のような工合だつた。

その老人が死んだのである。老人を知る一切の人は、惜しい人を亡くしたものだ、少しは寂滅の感に打たれたけれども、何しろ、九十三歳の高齡であつた。年に不足はなかつたのである。要するに、死ぬべき人が死んだのである。二、三日すると、誰もシックルス老人の事は忘れてしまつた。

そのシックルス老人がこの物語の主人公である。シックルスの三十八歳の時の悲劇が、ここに書く裁判事件である。

花形の外交官として、ダニエル・シックルスがロンドンの社交界に持て囃されたのは、当然過ぎた程当然なことであった。シックルスは三十六歳の美丈夫で、ギリシャの彫像に一抹の血を加えたような、すつきりとした好男子である。世才にも長けて、見識も高かった。誰にも評判が宜くつて、用務はいつも立派に弁じた。シックルスはロンドン駐在の米国大使館の高級書記官だったのである。

シックルス自身が好箇の外交官だったのに加えて、その夫人は又天成の外交官夫人であった。シックルスの名望はその夫人に依つて、高いが上にも更に弥高くなつたのである。

夫人の名はテレサと云つて、イタリア生まれの美人である。十六の時に結婚して、今年は二十歳になる。どちらかと云うと、小型の、綾羅にも耐えぬ楚々たる姿で、例えば朝の露を帯びた谷間の鈴蘭の様な優しい嫋やかな風情であるが、漆のように黒い瞳と、椿の花の様な真紅の唇とに、南国の婦人に特有な無限の濃艶な情熱があつた。殊にその言葉には万物を魅了する微妙な旋律があつて、ローレライの巖の乙女の歌のように、聴者を必ず恍惚たらしめたのであつた。

シックルス夫妻は互いに限りなく愛し合つて、相扶け、相寄つて、誰も羨む仲であつた。世に最もその妻を愛する夫あらば、それは、ダニエル・シックルスであつて、世に最もその夫を愛する妻あらば、それは、テレサ・シックルスだと、社交界では評判した。

そのシックルスが外交官を辞して、ワシントンへ帰ることになった。人々は驚いた。来年は公使になるだろう、二、三年すれば大使にもなるだろう、洋々乎たる前途を迎えながら、どうして外交官を辞したのであらうと怪しんだが、シックルスの望みは更に大きかったのである。シックルスは弁護士となり、代議士となり、上院議員となり、大統領となることを期待したのである。シックルスは外交官になる前に、一度

## 美しい刺客の話

闇の夜を馬車は走る。

車を駐めて、夕食の弁当を採った時には、地平線の彼方に、暮れ残る夕日の光を受けたお寺の塔が、色鮮やかな形を見せていたが、今は空も野もただ真っ暗で、車の前に附けた石油ランプの寂しい光が、わずかに一、二間の行く手を照らすだけである。

人々は大抵眠っている。狭い座席に寄り附いて、寝苦しそうに眠っている。食うものは食ってしまった、話の種も尽きてしまった、この上は眠るだけのことである。仰向いている者もある、首を垂れている者もある。あらゆる姿勢の限りを尽して、眠れるだけは眠ってしまったと云ったように、男も女も眠っている。窮屈な眠りを載せて、馬車は真っ直な道を、静かに走る。

これは大型の乗合馬車で、汽車のまだ発明せられないこの話の当時、長途昼夜の旅に用いられたものである。

乗客の中に、若い女がいた。涼しい青い目がぱちりと開いて、何かを遠く眺めるような、やや愁いの影は宿しているけれども、くつきりと細い鼻が気高く、可愛らしい唇には、この世の春を鍾あめたかとも思



われる。解けば地に垂れそうな淡い栗色の髪は、無造作に帽子の下に束ねてある、露に濡れた白百合のよう、優しい、美しい、しかし寂しい乙女である。夜は明け初めた。人々の寢息の中から、一人の若い男が静かに、乙女に近付いて来た。

跪いてその靴にも接唇したい風情ではあるが、身動きすら出来ない乗合馬車の中である、辛うじてその脇に寄り添って、若い男は遣る瀬ない思いを、乙女に打ち明けた。一昨日の朝カーンと一緒にこの馬車に乗り合わせて、ひと目見て、直に男は女を慕った。二昼夜を馬車に揺られている間に、この恋は火となり炎となって、終世を契るべき人は、この外にはないと思ひ詰めた。若い男は轟く胸を抑えつつ、衷心無限の熱情を、細い小さい声で訴えた。

美しければこそ、優しければこそ、この乙女は二昼夜の乗合馬車の中で、二度までも、未知の人から、結婚の申込みを受けた。最初の男は世慣れていた。世の常の男が女の心を牽き附けるあらゆる巧妙な技巧を、多弁の裡に使いこなして、結婚したいと迫って来た。しかし、この乙女は賢明だった、ひつこく言い寄る男を軽く抑えて、「ほほほ、まるで喜劇のお稽古ですね。でも、見物が少なくて、つまりませんわね。外の方を起して、もっとお芝居をやりましょうよ」と云った。これには流石の色魔も閉口して、爾後ひたすら敬遠していたのであるが、二度目の若い男は純真だった。

純真な青年の熱烈な求婚に対して、乙女は静かに答えた。「パリへ着いてから、何とかお返事致します。」仇し男の友情は、冷然として蹴返した、純真な青年には、パリへ着いてから返事すると挨拶した。しかし、乙女は恋に心を寄せてはいなかった。その志すところは、男女情事の溫柔の境地ではなく、今このフランスの全土に亘って、劫火を放ち、厲風を挙げる妖魔の本陣に迫り、蒼生のために、禍根を除くことに存する。琴を弾ずべきその織手に、白刃を執って、暴虐を逞しくする巨怪の首を刎ねることに存する。求

婚に応ずる考えは、勿論なかつたのである。

この乙女の名は、マリー・アンヌ・シャルロット・ド・コルデイ・ダルモン、通例、単にシャルロット・コルデイと云う。

シャルロットは北仏オーソン州の名家の出で、詩宗コルネーユの血を承けている。ヴォルテールとブルタルクスとは彼女の最も愛読したところであつて、前者に依つて、自由の尚ぶべきことを知り、後者において、英雄が人生を偉大にするゆえんを覚つた。その姿の如く、その心も優しかったから、彼女は温和なジロンド党の政策に賛同して、矯激なジャコバン派の言動に響感した。

シャルロットの容姿に付いては、文献上多少の疑いはある。戯曲小説の類において、美人として伝えられたことは、云うまでもないが、正史の資料の中には、反対の憑拠もある。革命裁判所の記録には、風貌態度共に粗野な一女性として、彼女を叙述し、特に「男子ノ如キ動作ト淫婦ノ形相」と、悪罵の筆を弄しているが、我等の最も信ずべき資料としては、彼女を写生したハウエルの絵画と近年発見せられたカーンの蔵書家マンセルの手記とがある。前者は、優しく清い姿を揚げ、後者には、少しく痘痕があり、身長はやや高く、艶麗と云う方ではないが、真に優しい女性であつて、何人も一見直に愛着の念を禁じ得なかつた、彼女は実（ガ）にや神明の天使である、と書いてある。これは、シャルロットを能く知っていたベルトーと云う婦人の語つたところを、マンセルの筆記して置いたもので、右の二つの貴重な資料に依つて、彼女の麗質を偲ぶに十分である。革命裁判所の記録は彼女に対する嫌忌の念に駆られたものであつて、革命裁判所は決して不偏不党の正義の殿堂ではなく、ジャコバン派の爪牙に過ぎなかつたことは云うまでもない。

## 帝王の寵臣となった泥棒の話

泥棒だと云って、馬鹿には出来ない。何某名流の御先祖は愛知県を荒して廻った常習犯だと軍談師は云う。(尤もこれは全く訛伝だと云うことが、近頃の確に証明せられたそうだが。) 往年バリの警視庁の刑事部長で後に世界の私立探偵業の元祖となったウージェース・ヴィドックが本職の泥棒であったことは、有名な事である。泥棒——しかも泥棒の親方が泥棒を検挙するのだから、立派な成績を挙げたのは当然のことである(拙著『不思議な犯罪の話』二二頁以下参照)。支那においては、革命の度毎に泥棒の集団を手先に使っていたことは、歴史上顕著な事蹟であって、従って、梁上から台閣へ榮転した君子もすくなくは無いようである。燕太子丹が万難を排して函谷関を脱出した悲壯な物語において、太子丹を扶けた鷄鳴狗盜の士は、どうも怪しい出身の者らしい。泰の趙高が漢楚の軍勢を目して山東之賊と云ったが、その「賊」と云うのは、国賊と云う意味ではなく、泥棒と解するのが相当だろう。とにもかくにも、支那において、泥棒が時々画期的大活動の少なくとも一部分に参与したことは事実である。

要するに、泥棒でもえらくなくなった者はある。しかし、それはその本人がえらいからえらくなくなったのであって、決して、泥棒だからえらくなくなった次第ではない。然るに、ここに一つ、少しもえらくない泥棒が、偶然に、えらくなくなった珍奇な話がある。ここに書くピエール・コアナルの話が、それである。

ピエール・コアナルは泥棒を以て終始した男である。何等の才能なく、何等の智識なく、何等の職業なく、全く一個の單純平凡な市井の無頼である。泥棒としても、決して親分と崇められる方ではなく、極めて低級な悪党である。しかも、コアナルは醜いだらしない容貌を持っていた。縦から見ても、横から観ても、実質から云つても、外形から推しても、彼は要するに下品な劣等な人間の屑であつた。それがひと度は立派に出世したのである。それは時代の賜物でもあつた、運命の悪戯でもあつた。畢竟するに、一個の馬鹿馬鹿しい偶然に依つて、彼は成功もし、出世もしたが、依然として彼は下等な犯罪者に過ぎなかつた。只々変幻無極有為轉變の彼の一生は、それ自身において、一つの怪奇である。

コアナルは一七七四年にパリの片田舎に生まれて、十七歳の時にパリの帽子屋へ見習に住み込んだ。これが丁度大革命勃発の二年後の事である。間抜けな仕事をしては親方に叱られて、一、二年過ぎている間に、ジャコバン党が跳梁して、恐怖時代を作り上げ、パリの天地は阿鼻叫喚の修羅の巷と化し去つた。血の雨は国外からも降つて来た。外国列強の侵入がそれである。国難来、国難来の声に激励せられて、壮丁はことごとく銃を執り、劍を把つた。コアナルも軍隊に編入せられ、のろまな一兵卒として、隊伍の厄介者になつていたが、国患一時平静に歸して、彼も除隊になつたが、さて困つたのは生活の途である。

碌々覚えもしなかつた帽子職はすっかり忘れてしまった。覚え込んだのは、当時の軍隊の悪習だつた酒と賭博とである。酒はいくらでも飲む。賭博は飯よりも好きだが、空つ下手だつた。斯様な若者の落ち着く先は大抵きまつている。

果せる哉、コアナルは泥棒を志願したのであつた。泥棒運が好いとでも云うのか、最初の手始めに押

## 疑獄の謎を解いた女探偵の話

世界戦争に際して、米国は多数の軍隊を仏国に送った。これはその頃南仏ツルーズに駐屯していた米国軍隊の中に入った疑獄の积け難い謎を、幾多の苦心の末に見事に解いた女探偵の話である。(尤もこの大仕掛な探偵の元締はポルドー駐屯の米軍本営附の憲兵司令官ラッセル少佐だが。)例に依って、描写の筆は拙いけれども、材料は小説以上に不思議な事実譚である。

そもそもこのツルーズの町はシーザーの頃既にトロザと云う名の下にローマにも知られた古邑であつて、今は人口十八万、第十一世紀中の草創に係るサン・セルナン寺を始めとして、大僧正殿、ノートル・ダム・ド・ラ・ダルバード寺院、ガロ・ローマン期の逸品を蔵する美術館等由緒に富む名所は多いが、歴史のない米国から来た壮丁の連中は、左様な古い物には心を惹かれなかった。しかしながら、ツルーズはパリの南四百六十余マイル、ポルドーの東南百六十マイルの辺境に位しているがために、勿論戦地とは甚だしく隔っている。出征とは全く名目のみで、戦地の気分にはなれないが、戦時の気分は各所に漲っていた。血気盛んな軍人達は夜になると紅灯の巷に出掛けた。そこには甘い酒と当所名物の臍物や茸類を煮込んだ肉饅頭パティ(日本からインド洋を経てヨーロッパへ行くと、四十日位で、マルセイユに着いて、そこで始めて

西洋の西洋料理を食わされる。食わされる物は何でも旨いが、都合が好いと、このツルーズの肉饅頭（あり附くことがある）とが彼等を待ち構えていた。ツルーズに駐屯していた米国軍はまるでフランスへ金を使いに来たようなものであった。彼等の行くカフェーにはいかがわしい職業の女が盛んに出没した。

或る夜のこのツルーズに近年稀有と云われる大暴風雨が襲来した。流石にこの夜はカフェーの歓楽を逐う勇士もいなかった。第何大隊の連中は夕食後も食堂テントの中でカルタ遊びに耽つていた。魔窟探險隊の隊長ホリス軍曹もこの夜ばかりはカルタ仲間に入って、しかも大分勝運に向いて来たので、悦に入つて、頻りに戦を挑んでいた。その刹那、テントの幕の合せ目を少しく引き開けて、軍隊用の手套をはめた手が静かに出た。手套の手には同じく軍隊用の拳銃が握られていた。皆カルタに熱中していたから、それに気が附いたのは、一人の伍長だけであつた。おや、変だな、誰か悪戯をするのか知らぬ。それにしても、外は車軸を流す大雨である。大雨の中に立つて、何をするのだろう、と不思議に思つていた瞬間、拳銃は発射して、ホリス軍曹の背部から前面へ、見事にその胸を貫いた。ホリス軍曹は即死したが、曲者は雨と闇とに紛れて、逃げてしまった。手懸りは、軍隊用の手套と同じく軍隊用の拳銃が見えたと云う事——ただそれだけである。

大隊長カーネイ少佐は直に隊員全部に拳銃の提出を命じて、その検査をした。

拳銃の検査の結果、当夜発射した形跡の確実なものは、只々一つで、その持主はムーア志願兵である。ムーアは極力犯行を否認して、自分は当夜——兇行の二時間前に歩哨に立つていたが、犬が吠え附いて、うるさくつて仕方がないので、それを射殺したのだと弁解した。ムーア志願兵が歩哨に立つていたことは